

---

# 魅月町・夢想の鳥

徳山 ノガタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魅月町・夢想の鳥

### 【Zコード】

N2459D

### 【作者名】

徳山 ノガタ

### 【あらすじ】

わんぱく小学生の『ゆんぱくじゅつぶ』場孝太郎と、その親友神代才輝、そして超い加減な教師・有田の騒がしい日常。『町』自身が語る現代ドラマシリーズ・その2。

## プロローグ・1)あいせつ

あ、あ……オホン。ただ今マイクのテスト中……。といふ下らない冗談はさておいて、お久しぶり、あるいは初めてまして。私の名前は魅月町。みつきちょう、と読む。すでに知つておられる方もおいでだろうが、改めて自己紹介させてもらおつ。

魅月町　九州の中ほどにある地方都市。西の太平洋と東の山に挟まれており、割と自然が豊かな町だ。温暖な気候で、冬でも雪は降らない。主な収入は観光と農業。町の中心部には小中学校が2校ずつ、高校、大学が1校ずつ存在する。いずれも県立だ。

以前私は【針葉の花】というストーリーを皆さんにお話した。そして今こいつしてお会いできたことの記念に、もう一つ別のお話を紹介しようと思つ。

……なに、前の話を知らないても問題はない。舞台は同じこの魅月町だが、登場人物やストーリーは全く別物だ。

タイトルは……【夢想の鳥】

さあ、じ覽あれ！

## 第1章・高鳴り（前書き）

弓場 孝太郎（ゆんば こうたろう）

12歳・小学6年

絵に描いたような野球少年。希望ポジションはピッチャーだが、制球力がメチャクチャなため外野をやらされている。

第1章・高鳴り

やかましいつ！と、思わず言いたくなるほど大声で叫んでいるのは、今回の主人公の一人・弓場孝太郎。ゆんば こうたろう 小学6年生。

「はいはい、学校の屋上でどびてえー、なんて言わない。自殺志願者と間違えられるわ」

諭すように言ったのは、同じく6年生の神代  
じんだい 才輝だ。  
さいき

昼休み、二人は小学校の屋上にいる。孝太郎はフェンスの金網をつかんでもう一度叫ぶ。

「とびてええええつ！アメリカにとびてええよおおお！」

何故？

才輝の問いに、涙でぐしゃぐしゃになつた顔が振り向く。

「ああ、お前の好きな野球の人か。メジャーリーグ、ファンなら嬉しい」とじやねえか?」

「そりゃやうだけどよ～……中継でプレー見れる機会がほんんどなくなるだろ？　がよ～！」

会話を聞いて分かる通り、孝太郎は大の野球好きだ。

「確かに……。せいぜいスポーツニュースぐらいだな。見れるのは」「ちっくしょおおーとびてー！ アメリカにとんで生で見てえよー！」

その時、キーンコーン、カーンコーンと、チャイムがなる。昼休みの終わりを告げるチャイムだ。

「ほら、掃除の時間だ。オレは校庭掃除だから先に行くぞ」

「うー……」

才輝は、孝太郎とは対照的に冷静で大人びた性格だ。顔つきもよく、女子によくモテる。そんな彼が感情優先の孝太郎と仲良くしていられるのは、傍から見ると奇異に見えるが、当の才輝本人はけっこう楽しんでいたりする。

孝太郎と才輝。これにもう一人加えたトリオが、この物語の主人公である。

午後の掃除と授業が終わり、HRを始めるために日直が担任の教師を呼びに行っている。その間も、孝太郎は悲しみにくれていた。（さすがに教室で泣いてはいなかつたが）机に伏せてうなだれる孝太郎の頭を、誰かが叩く。

「んあ……？」

孝太郎が顔をあげると、同じクラスの井原 いはら 美春 みはる だった。

「美春……？ なに……？」

「なに、じゃないでしょ！ なんで掃除に来なかつたのよ…」

美春は気が強い女の子で、孝太郎と同じ教室掃除担当だ。

「掃除どこのじやなかつたんだ……つるさいなあ……」「

「なによ、その言い方！ 全然反省してないじゃない！」

「……孝太郎、お前まだ悲しんでたのか」

孝太郎の劣勢を見て、才輝が援護に入る。

「悲しむつて、なにがあつたの？」

才輝が出てきたので、他の女子も話題に入つてくる。

「コイツは、大事な人が遠くに行つてしまつて悲しんでたんだ」

「へえ……」

数人の女子が同情と好奇の目で孝太郎を見る。が、美春は騙されない。

「そんなの、掃除をサボる理由にならないわ。……どうせ口クな人じやないでしょ、あんたの大事な人なんて。」

「なにい……？」

孝太郎が立ち上がって美春を睨む。

「バカにすんなよ！ 男のあこがれを！」

「なによ、あたしより背が低いくせに！」

（はじまつた……）

「うつなると、才輝でも手がつけられない。

「お前が高すぎるんだよ！ オト「ホンナ！」

「どじがよ！ ちやんとした女の子でしょ！」

「く～せつです……かあ！」

「キャアー！？」

孝太郎は勢いよく美春のスカートをめくった。

「このバカ！」 バシッ！

美春が顔を真っ赤にして拳を振るつた。

「いでつー グーで殴るか！？ 普通……」

「最低！ 变態！」

「いや～いい音したなあ、井原。また威力があがつたんじやないか？」

教室に大人の声が入つて來た。

「先生！ 今、弓場くんが……」

「孝太郎～どうせスカートめくるなら、保険の伊藤先生のやつてくれないか？ 僕がやつたらマズイからな」

このふざけた発言をした教師が、孝太郎たちの担任・有田である。

## 第2章・石原（前書き）

神代 才輝（じんだい たくわく）

12歳・小学6年

ポジションはサーブ。名前の由来は、能を発揮できるように「だそうだが、のたかが知れる。

母親いわく「あらゆる面で才  
「輝」の字の違いから親の学

「わあ～て……じつくつお説教してあげますかね」

放課後の職員室。有田は孝太郎と才輝をイスに座らせて一ヤリと笑う。

「とつあえず……掃除はやつとけ。律儀にやつとる奴らに迷惑だ」

「はい……」

「と、言いたい」ところだが……遠藤選手がいなくなつたのはシライしなあ……。掃除どころじやないつてのもわかる

「だ、だろー！ 先生もそつ思つだりつー？ やつぱり中継で見たいよなー？」

孝太郎の目が輝く。

「いや、遠藤選手のいたチームが来年も優勝することに、5万円賭けてたんだ。まいつたな～賭けた途端に抜けるなつちゅう話だよ。オレの給料からすれば、5万円なんて大金だぜ？ 負けたら酒飲む金がなくなつちまつ」

「は……」

「アソツがいれば次も余裕だと思つてたのによ～」

「……オホン。有田先生？」

近くにいた別の教師が咳払いをする。

「ま、まあそれは置いといて……」

置くんかい。

「その掃除の前、昼休みに屋上でバカデカイ声を出していたやつがいるんだが……」

「な、なんで俺だつてわかつたの！？」

「あ、お前だつたのか。まだ誰とは知らなかつたのに」

「孝太郎……バカ」

才輝がため息をつく。

「自分でバラすな……」

「わ、悪い、才輝！　でも、大声出しちゃいけない、なんて決まりあつたつけ？」

「……大声を出す出さない以前に、屋上は立ち入り禁止だろーが」

「あー、そういうえば……」

孝太郎、必死になるほど自滅する小僧である……。

「それとさつきのセクハラ行為。これについてはみつちりと説教し

てやうんとな

「次のターゲットは保険の伊藤先生、だつけ?」

孝太郎が反撃に出る。

「……まあ、それも置いといて……」

それも置くんかい。

「お前ら、来月隣町の野球チームと試合するんだって?」

説教はどうした。説教は。……どうもシッコ!!が多くなるな……  
今回の私は。それぐらいいい加減な教師だ。

「ちやんと練習やつてんのか?」

「そう、それなんだよ先生!」

孝太郎が声を張り上げる。

「俺たち、いつも公園のグラウンドで練習してるんだけどさ、最近  
いつも中学生の人たちが先に使ってて練習できないんだよ~」

「ああ? お前ら学校終わってすぐにグラウンド行つてるんだ? 何で中学生が小学生のお前らよりも先に来れるんだ? 中学生は授業終わるの遅いだろ」

「学校を自主早退しているんですよ。この間大声でやつしゃべって  
いました」

才輝が口をはさむ。

「自主早退つて、よしうるに学校サボつて抜け出してるだけじゃねえか。でも学校サボつてでもやることが野球つて……。健全なんだか健全じやないんだか……」

「健全じやありませんよ。どう覗くとも」

「ほら。根拠は？ 見た目だけで判断するなよ？」

「その中学生たちが集まっている場所はグラウンドですけど、やつているのは野球じやなくてタバコでしたから」

「なるほど。スゲーわかりやすい。さすが才輝」

素直に感心している。

「ねえ先生！ あいつらどうにかしてよ！ あそこが使えないと他に練習するところないよー。この町狭いんだから…」

狭いとか言つなー……広くはないのは確かだが。

「おいおいおいおい。オレは小学校の先生で、小学生を世話するのが仕事だ。中学生のこととは中学校の先生に頼めってんだ」

「……良識のある大人として、未成年の喫煙に関して何も思ひませんか？」

「いや、オレも中學生のいろからタバコ吸つてたし

「……オホン。有田先生……」

再び咳払いが聞こえる。が、今度の音の発信源は先ほどの教師ではなく、いつの間にか背後にいた校長先生だった。

「有田先生の中学校時代の話、校長室でじっくり聞かせていただけませんかな？」

「や、やだなあ校長先生。昨日テレビでやってたドラマのマネですよ……」

（ダメだ、この人……。）

それが、孝太郎と才輝の共通の感想だった。

## 第2章・紅鷺（後書き）

サブタイトルは「むやなぎ」と読みます。

### 第3章・決起（前書き）

有田 衛（ありた まもる）

27歳・小学校教諭

元々は高校の教諭だつたが、「性に合つ」の理由から転勤。タバコは一時控えていたが、最近また吸い始めた。

### 第3章・決起

翌日。相変わらず元気のまま、孝太郎は登校していた。

「『』場君、おはよ~」

「あー……おはよ……美春」

「テンション低いわね~。大丈夫?」

昨日の剣幕はどうへやら。日が経つとあつという間に忘れ去られるのが子供のケンカである。

「いつまで落ち込んでるのよ。未練がましい」

美春も、普段は親切な女の子である。

「ううせえなあ……」

「なによそれ。せっかく心配してあげてるのに」

「お前なんかに心配されたくない……」

「…………」

……すぐ『』再発するのも、子供のケンカである。

「井原さん、孝太郎、おはよ~」

才輝がタイミングよく現れる。

「あ、神代君、おはよ！」

「おはよ……才輝……」

「神代君、コイツビうにかならなーい？」

そう言つて美春は孝太郎の頭を小突く。

「無理もないさ。結局昨日もグラウンドが使えなかつたしな」

「あの中学生達をえいなけりや……ホームランカッ飛ばして少しはストレス発散できるのに……」

「フン。ブツブツ言つてないで、ガツンとやつつけちゃえばいいのよ。男らしく」

美春が拳を振り上げながら言つ。

「そりやお前みたいに異常な怪力がありやあそつしてるナゾだもん……」

「…」

「だれが異常な怪力よー！」

「うわせええ！ あああもうどびてえええええつー！」

キレた。

「…………」

「ちくしょう！　いいよ、やつてやるよー。今日、中学生追い払つてやるー。」

「ああー、それじゃあ給食を食べる前にひとつ言つておきたいことがある」「

4時間目の授業が終わり、給食の時間に有田が教壇に立つ。

「最近、男子の素行が悪いっつー意見が多いので、今日から男子にはあるスローガンを掲げてもらつ」

「スローガン……？」

「ズバリ、『大人になるな、紳士になれ』だ！　どうだ、なかなか渋いだろ？」「

「意味不明です」

また何かふざけたことをやらかすつもりだ。

「と・に・か・く。いいかあ？　男子。まず挨拶する時はシルクハットを取つて『『ひきげんよう』』

「シルクハットなんてもつてませーん」

「常に洗いざらしのハンカチーフを持ち歩け」

「ハンカ……え？　何？」

「そしてテーブルマナーは完璧に」

「先生。 どうあえずお手本見せてください」

「……男ならワイルドに喰え!」

「どうだ。 イメージだけで紳士を語るな。

「すみません。 結局何がしたいのかよくわからないんですけど」

「おっ、 そうか。 ただの遊びだから本気で考えるな」

最初からだれも本気にしていいが。

「まあ、 いいや。 そんじゃ いただきまーす」

「いただきまーす」

「……」のクラスはいつもこんな感じだ。

「……先生」

「ん? ビーした孝太郎」

孝太郎が有田の隣に立つ。 いつになく真剣な、 思いつめた表情だ。

「オレ、 今日中学生たちやつづけむ」

「さうか、 ジャあフンシングで決闘を申し込め。 あるいはボクシ

ングだ」

パンをかじりながら答える。

「マジメに聞いてよー。」

「マジメだつづーの。いいかあ？ まだガキンチョのお前らが中学生とともにケンカしたつて勝てるわけねーだるーが（中学生もまだガキだけど）。ちゃんとしたスポーツだつたら、少しあは勝ち田があるかもしねえだろ。少しあは

そこを繰り返すな。

「……なんでフーンシングなの？」

「英國紳士っぽいだろ。なんとなく」

「……もひいよー。」

孝太郎は自分の席に戻つて行く。

「…………熱いねえ…………。まったくガキは熱血で……つて熱つ！ 热い、このスープ、メチャクチャ熱いぞー！？」

ガシャーン。

「あー、先生がスープこぼした！」

「の騒ぎに田もくれず、孝太郎は黙々と食べ続けた。

## 第4章・羽ばたき

その日の午後は2時間とも移動教室で、専門の先生の授業だった。授業が終わって日直が有田を呼びに行く。

しかし、戻ってきた日直と一緒に教室に入ってきたのは、有田ではなかった。

「えーっと、有田先生が急用で帰られたので、私が代わりに帰りのH.R.をします。

保険の伊藤先生だった。

「急用つて、何の用事ですか？」

「さあ……大学の後輩の演劇に招待された、と言つていきましたけど詳しく述べ……？」

そう言つて伊藤先生は首をかしげる。

「確か、畠倉浪才の小説をもとにした演劇をやる、と大学生がポスターで宣伝していたな。……しかし、あの有田先生がわざわざ演劇なんか見に行くか……？」

才輝が孝太郎に話しかける。

「知るか、あんなやつのことなんか」

孝太郎はふてくされたまま答える。頭の中は放課後の決闘のこと

で一杯だった。

「……孝太郎、やっぱりケンカはよせ」

「なんでだよ。今更変更しねえよ」

「よつは野球の練習ができればいいんだろう。他の野球クラブのやつらと一緒に、学校の運動場使つて他のクラブに交渉してみよう。……下手に大騒ぎになつて、試合に出られなくなつたらどうするんだ」

「……わかつたよ。あのダメ教師は役に立たないし……」

放課後、交渉を始めるが、なかなか上手くいかない。グラウンドの半分を独占している女子ソフトボールのキャプテンが美春だといふことも大きいが、「野球クラブの活動場所は校外のグラウンド」ということが伝統になつてているからもある。

徐々に過ぎて行く時間に、孝太郎の苛立ちは募る一方だった。

ここで時間を30分ほど遡り、“ダメ教師”有田を追つてみよう

「かあ～！ 肩いて～、腰いて～まだ20代なのにかなり体がなまつちまつてる～。どれ、もう一球！」

力キーン、ヒバットが鳴り、白球がネットに飛ぶ。

そう、演劇とはただの口実で、有田は例のグラウンドに来ていたのだ。

「どうよ、この見事なスイング。惚れぼれするぜ」

「誰に言つてるんだ。」

と、その時、中学生が5・6人、グラウンドにしゃってきただ。いずれも一見して「不良」という印象を受ける者ばかりだ。その足もとに、ボールが転がる。

「お~い、それ、取つてくれないか~?」

有田が中学生たちに手を振る。

「ああ? 何やつてんだ、あのオヤジ」

金髪の生徒が有田を睨む。

「知らねえよ。とりあえず返しどけ」

他の生徒がボールを拾つて返す。

「サンキュー。お、いい肩してんな」

有田を無視して、中学生たちはベンチにたむりある。

その中の一人がタバコを出した時、有田が声をかける。

「おい、お前ら。今日は早く帰った方がいいぞ」

「……」

「無視すんなって。じゃなことお前ら、ボコボコされたるやつお？」

「あ……？」

金髪が立ち上がり再び有田を睨む。

「誰がどうなる、だつて？　まさかお前が俺らをボコすつもりか？」

「いや、俺じゃない。ただのガキ共だ」

話しながら有田はベンチに近づいて行く。

「ガキってのはキレたらなにするかわからねえからな。早くこのグラウンドから出た方がいいぞ」

「」の忠告を聞いて、仲間内で話し合いが始まる。

「ガキ……。あの、よくこの辺ウロチョロしててる小学生か

「ああ、俺らがいるのを見てすべすべ逃げるやつらだな」

「で、あのオヤジが誰かは知らないが、全く問題ないな」

「小学生にケンカ売られるから逃げる……ナメてんのか？　オッサン」

最後のセリフは有田に向けられた。

「オッサン……オレはまだ20代だつづーの……まあ、本当は

お前らじやなくて返り討ちにあつガキの方が心配だから忠告してんだ。あれでもオレのカワイイ……」

「「チヤ「チヤ言つてんじやねーぞ！」「ハツ！」

青空に、バキッという音が響いた。

## 第4章・羽ばたき（後書き）

畠倉浪才に関しては【針葉の花】に説明があります。また、この名前は今後のシリーズでも登場する予定です。

「せめて今回でもいいから練習させてくれないかな」

「ダメよ。ソフトと野球じゃ全然違つわよ」

才輝はダメ元で再び美春に交渉するが、結果は芳しくない。時間がだけが過ぎて行き、5時の鐘が鳴り響いた。

ねえー、ミハちゃん。少しごらいいいんじはないの?」

ソフト部の女子が会話に入ってくる。才輝の顔をチラチラと見ていふことから、その意図が簡単に読み取れる。

「……で、アイツを甘やかしたら、いつまでたっても解決しないでしょ？」

「……ハちゃんと、おゆれんみたい……」

「ハア  
……」

才輝がため息をつくと……。

「おい、才輝くん！」

同じ野球クラブの生徒が息を切らせて走つてくる。

「どうした？」

「……ゼエ、ゼエ、孝太郎君が、さつき……学校の外に、出て行つ  
ちゃつた……」

「……あきらめたのか……？」

「ううん、と、頭を横に振る。

「スゴク……怒つてた。もうガマンできないって……」

「なんだつて……ー？」

孝太郎は、単身でケンカに行つたのだと言つ。

「バカ……孝太郎。クソッ！」

才輝は孝太郎を追うため、校門へ走り出した。

「俺は絶対、野球選手になるんだ！ 中学生なんか怖がつてたら、  
いつまでたつても遠藤選手みたいなスターになれない！」

孝太郎は公園のグラウンドへとまっすぐに向かつて行く。その手  
は固く握りしめられている。

「やつつけてやる……！ 一人で……！ 先生も才輝も必要ない！」

小学生の足は速い。あつとこつ間にグラウンドに這いつき、そして見えた。

「せ、先生！？」

グラウンドの中央、ピッチャーマウンドの上で有田が中学生たちに囲まれて倒れている。

その顔はアザだらけになっていたおり、口が切れで血が滲んでいた。

「ほり……//口……。来ちまつたじゅねえか

かすれた声で有田が中学生たちに声をかける。

「あいつ、キレッから……なにするかわからぬーぞ……」

言ごさる前に、孝太郎がマウンドに突っ込んで来た。

「おひともー」

長身の生徒が孝太郎を捕まえて持ち上げる。

「放せ、はなせよー。」

「なー、コヤシビツクルヘー。」

長身が仲間を振り返る。

「アハハへんに捨てておけばあー。」

「アーリー語のとべか」

「ギャハハ！ それいい！」

金髪が高く笑う。と、その足を有田がつかむ。

「おい……」

低く、重みのある声だ。

「そいつに手え出すな。俺の生徒だ」

あ？ てめえ教師だつたのかよ！ 丁度いい！」

手を振り払つて叫ぶ

「先公なんぞケンぐらえた！」下らねえ説教は、かりし世がて！」

自由になつた足が 有田の顔面を襲ふ

「が  
…  
つ  
！」

顔がゆがみ、鼻血が出る。今度は別の男が、有田の背を踏みつけ

「二〇一九年」

長身が言つた時、その腹に重いものがぶつかつた。

「 ものの あらわし が ある ようだ ね。」

孝太郎だ。孝太郎は泣きじゃくりながら、手足をバタつかせている。

「い、つて……」

長身がうずくまり、孝太郎は腕から逃れる。

「先生を、先生を蹴るなあ！」

「うつせえぞ、このガキ」

振り向いた金髪に、全力でタックルをかます。

「うげつ！」

金髪は一瞬ひるむが、すぐに体勢を立て直して孝太郎を地面に押さえつける。

「先生は、そいつは……イイカゲンだけど、メチャクチャだけど……！俺たちの大好きな先生なんだよ！」

顔を土で汚しながら、なおも孝太郎は叫ぶ。

「先生は他の大人とは違つんだ！おまえたちなんかが……勝手に……バカにすんな！」

「黙れ、クソガキ！」

「俺は……あんなに先生のこと嫌つてたのに……役に立たないって

言つたのに……先生は、俺のために来てくれるんだ……！　こんな、こんな人を……お前たちなんかが……！」

涙と土でぐしゃぐしゃになつた顔が、残りの中学生たちを強く睨みつける。

「孝太郎……」

有田が、ゆっくりと起き上がる。

「カツ」「いいぞ。今のお前、遠藤選手よりも、ずっと……」

「てめえ！　まだやんのか！？』

一人が叫んだとき、別の声が遠くから聞こえてきた。

「孝太郎！　先生！」

「才輝……っ！？」

才輝だけではなかつた。野球クラブのメンバー、そして美春までもが一緒に来ていた。

「先生！」

美春が有田と孝太郎を見つけて駆け寄りつとする。

「おい、どうする。面倒なことになつたぞ」

突然の小学生の集団に驚き、金髪が仲間にさへ。

「……大勢に顔を覚えられたら厄介だ」

一つの結論に達し、中学生たちは一斉に逃げだす。

「待て！」「の野郎！」

追いかけようとする孝太郎の肩を、誰かがつかんだ。

「さすが未来の大リーガー。凄まじい気迫だつたぜ」

有田がニヤリと笑うのを、孝太郎は滲んだ目で見た。

## 第5章・引っ張り（後書き）

タイトルの「引っ張り」とは、鳥の鳴き方の名称で「急速な集合を促す」声のことです。

## Hプローグ・天、高く、鳴き笑う鳥

「遅くなつてゴメン。ミハちゃん、今どうなつてんの？」

ソフト部の女子が美春に声をかける。

「9回のウラ、1・2で負けたから、ここで逆転できなきゃ敗北決定。2アウトでランナー2・3塁」

「バッターは？」

「……神代君」

「やつた！ 見にきた甲斐があつた！」

(……試合に勝つてからいいなさいよ、せめて)

2塁ランナーは孝太郎だった。

才輝ならまず打てる。しかし、次のバッターはアテにできない。この打席で孝太郎が帰るしか逆転の道はない。

「頼むぞー、才輝ー！」

「神代くーん、頑張つてー！」

声援を背に、才輝はバッターBOXに立つ。

第1球、才輝は見逃す。

「ストライク！」

審判が声を張り上げる。

歓喜と落胆の声がグラウンドに響く。

才輝は一塁側のフェンスの向こうを見た。そこには有田が座っていた。

「しっかりやれよー！ 才輝イ！」

視線に気付いて声援を送つてくれる。

「女の子が見てる前で恥かくなよー！ つーか羨ましいぞー、コノヤローッ！」

どんな応援だ。有田の隣に座っているスース姿の男もクスクスと笑っている。

視線をピッチャーに戻し、才輝はフォームを構える。

第2球……。

「ストライク！ ツー！」

緊迫した空気が一瞬緩み、またすぐに張り詰める。……追い詰められた。

「才輝ー！ 打てる、お前なら打てるぞー！」

孝太郎の激励に、才輝はうなづく。

そして第3球……。

カキーン！

「行つたあ！ レフトだ！」

白球が放物線を描きながら飛び、外野手の後ろに落ちる。

「ホームイン！ 同点！」

レフトがボールを拾つた時、3塁にいたランナーはすでにホームベースを踏んでいた。

「行け！ 孝太郎！ ここで追い越せ！」

才輝が叫び、孝太郎が3塁を蹴る。それを見て、レフトから中継ヘ球が投げられる。

「間に合え！」

中継からバックホームの鋭い返球。タイミングはきわどい。

有田が立ち上がり、目一杯声を張り上げる。

「とべえええええ！ 孝太郎！」

キャッチャーが球を受けると同時に、孝太郎の体がホームに滑り

込む。

「どうちだ……っ？」

有田がつぶやく。隣の男も、いや、観客のほとんどが呼吸するのも忘れて審判の声を待っている。

一瞬の沈黙の後、高らかに審判が宣言する。

「セーフ！ セーフ！」

ワアアアーと、味方のベンチが湧く。

再び土で汚れた顔は、笑っていた。その視線の先にいる男も。逆転を決めたバッターも。

夢を追いかける少年は、今、確かに飛んだ。

「……」この物語に幕を下ろそう。まだまだ彼らの成長していく姿を追っていきたいところだが、それはまた別の機会に。

……ドラマを生み出してくれるのは、彼らだけではない。この町には多くの人間が存在し、そして人の出会いの数だけドラマがある。また、新しい話を聞きたくなったら、私のところに来なさい。いつでも歓迎しよう。

……私の名前は魅月町。また、会つ日まで。「さあげんよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2459d/>

魅月町・夢想の鳥

2010年10月10日05時52分発行